



## 神経発達支援リハビリ(療育) 開始について



リハビリテーション室 主任 喜田 啓介

平成 29 年 5 月より小児科神経外来に  
合わせ、4 名の担当作業療法士 (OT)  
を中心に神経発達支援リハビリ (療育)  
を開始しました。対象となる疾患は、自  
閉症スペクトラム、注意欠如多動症  
(ADHD)、言語発達遅滞、運動発達遅  
滞などです。主な症状としては、落ち  
着きがない、じっと座って活動や学習を  
することが上手くできない、全身の筋肉の  
バランスや手先の不器用さで運動や字を  
書くことが苦手、言葉が出にくい、子供  
同士での遊びができないなどで、就学  
前後のお子様为中心です。

現在行っている療育の内容は、運動  
や遊びなどの活動を利用して、個々の現  
在の発達段階で習得しておかなければ  
ならない課題 (運動機能、日常生活技能、  
学習基礎能力、心理社会的発達など)

を感覚統合理論や SST (ソーシャルスキ  
ルトレーニング)、ビジョントレーニン  
グ等を用いながら、療育ルーム内にてマン  
ツーマンで支援しています。

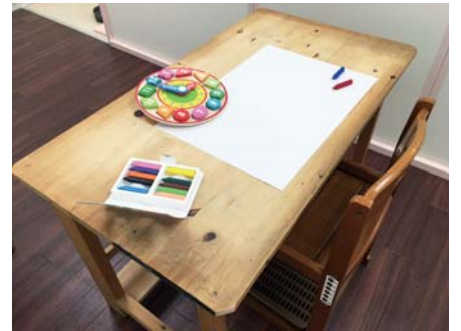
また、日常生活では、使いやすい箸  
の種類やおもちゃ、保護者との遊び方  
に関する助言、着替えや入浴がスムーズ  
になるような練習、学童期では物差しや  
コンパス等の使いやすい文具の助言も行  
っています。

療育までの流れは、医師の診察後、  
必要に応じて臨床心理士による発達検  
査やカウンセリングを行い、OT が評価  
をします。評価の内容は、運動機能や学  
習基礎能力等の検査だけではなく、学  
校で使用しているノートを実際に見せ  
ていただき、字や線の歪みの把握など  
もしています。さらに、保護者の方より  
家庭や園、学校での様子や実際に困  
っていることの聞き取りをします。こ  
れらの結果をもとに医師、臨床心理士  
と OT でカン

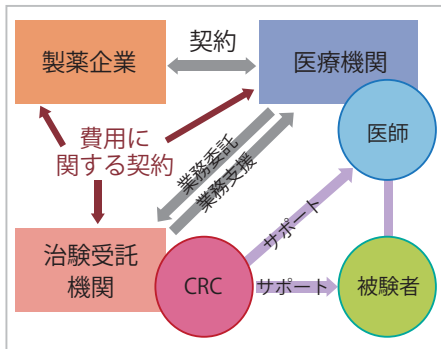
ファレンスを実施し、保護者、対象の  
お子様と目標を明確にして実際の療育  
にあたります。

今後もよりよい療育を展開していく  
ために、研修への参加はもちろんのこと、  
地域の関係機関ともコミュニケーション  
が取れるようにしていきたいと考えてい  
ます。医師をはじめ、様々な方々と連  
携を図り、保護者と協力しながらお子  
様の療育環境の充実を目指してまいり  
ます。

左上、下の写真：療育ルーム内の設備・配置の様子



## 治験と治験コーディネーターについて



治験の仕組み

治験には倫理的に問題なく実施するた  
めに法律による厳しい規制が課されて  
います。参加前に被験候補者への詳細な  
説明を必須とし、参加するかどうかは本  
人の意思で決定します。また、安全性を  
保つためにたくさんの厳密なルールが治  
験ごとに定められています。実施する期  
間は治験によって1年未満から5年以上  
と様々あり、来院回数や検査の内容・頻度  
も細かく設定されています。

医薬品の開発は主に製薬企業が行っ  
ていますが、治験については医療機関で  
実施する必要があります。そのため企業  
は専門知識を持つ医師を選定し、医師の

薬剤部 調剤課 主任 鶴本 央子



所属する医療機関と契約を交わします。  
医師は治験を行う上で、その複雑なル  
ールを遵守しなければなりません。医  
師一人で行うには負担が大きいため、  
治験業務を専門に行う治験コーディネ  
ーター (CRC) という職業が存在します。

CRCは被験者の対応や医師のサポ  
ートはもちろんのこと、治験に関わる  
院内各部署との調整、企業対応、報  
告書の作成など、問題なく治験を行  
うための業務を幅広く担っています。  
治験の適切な実施のために治験に関  
わる法律の他、薬剤や医療に関する  
知識も必要とされる職業です。

このように治験実施のためには、高  
い専門性をもった人材が必要なため、  
治験受託を専門で行う企業が存在し、  
製薬企業、医療機関と三社契約を結  
んで治験業務を支援しています。当  
院では現在、腎性貧血や糖尿病、心  
不全などの治療薬の治験を約20  
件行っており、EP総合とBELL24  
の2社からCRCの方を派遣していただ

ています。

治験実施の際は院内スタッフの協力  
が必要不可欠となります。看護部は  
被験者へ治験のルールに沿った配慮  
を行っています。薬剤部は治験薬の  
管理、臨床検査室や画像センター  
では治験特有の検査を行います。ま  
た治験では、一部診療が保険外の扱  
いとなるため、会計も独特な扱いと  
なります。どれも善意で治験に参加  
してくれている患者さんから得た  
貴重なデータを無駄にしないために  
欠かすことのできない業務です。医  
薬の発展のため今後も適切な治験  
の実施に取り組んでいきたいと思  
います。



大橋有里さん (EP 総合) 伊藤加恵さん (BELL24)